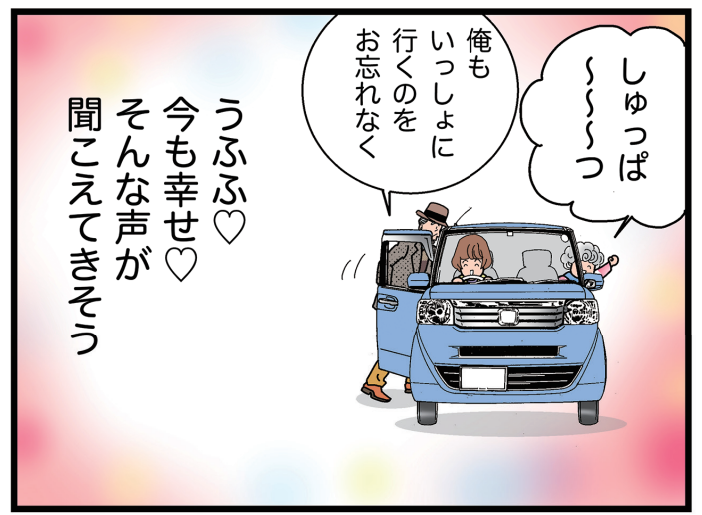
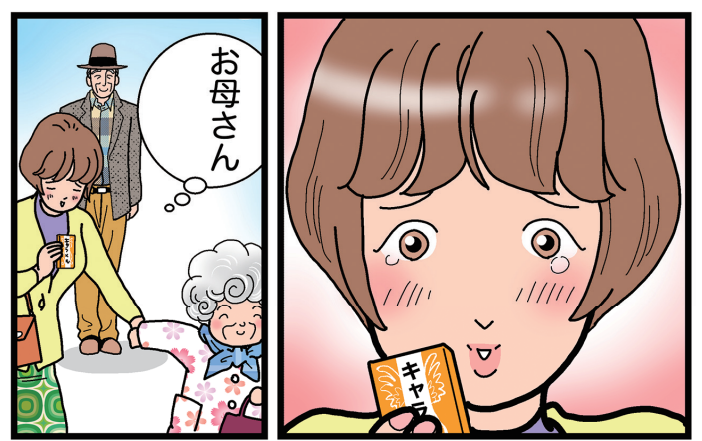
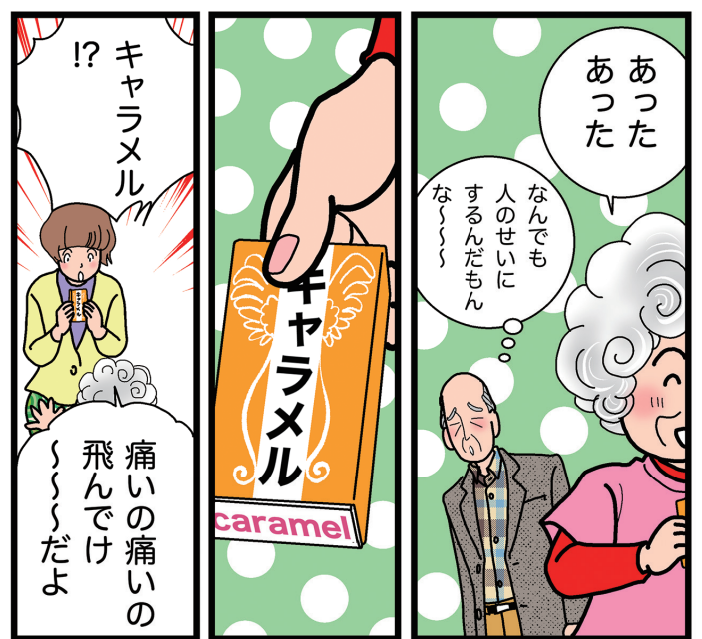
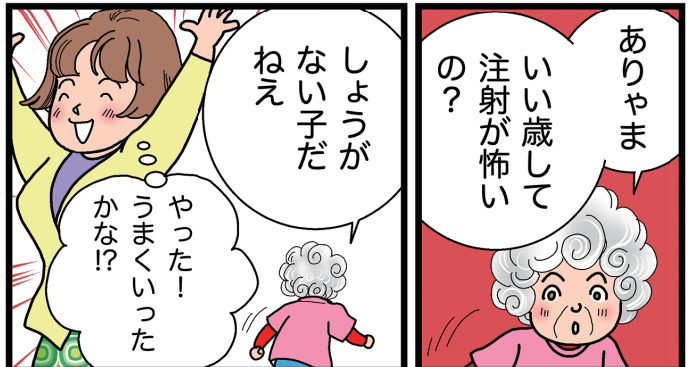
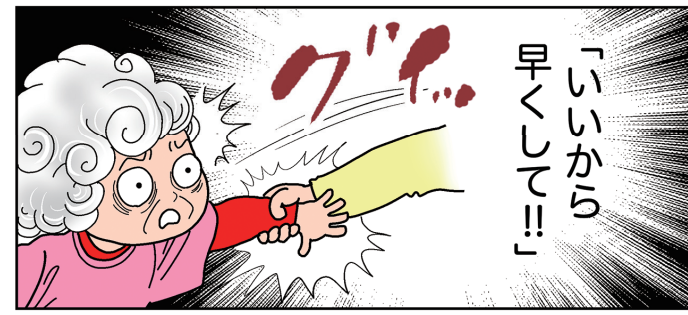
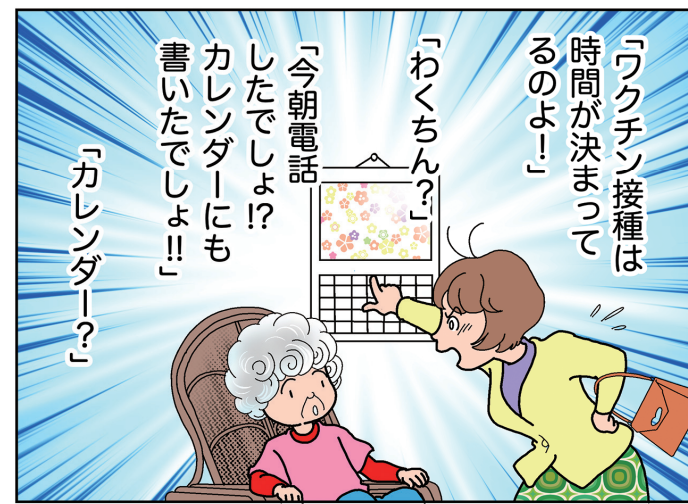
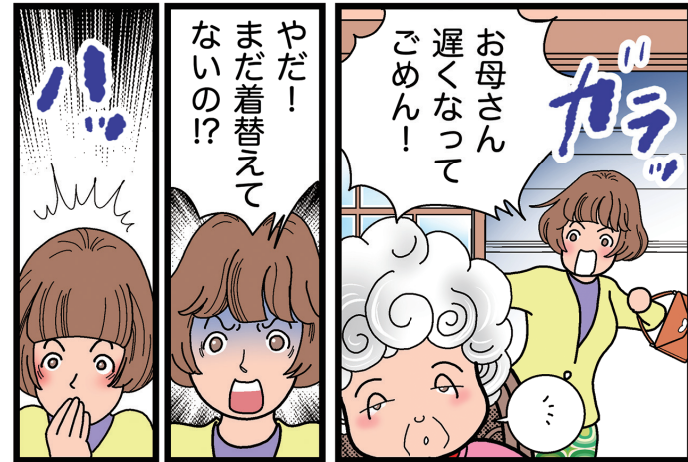
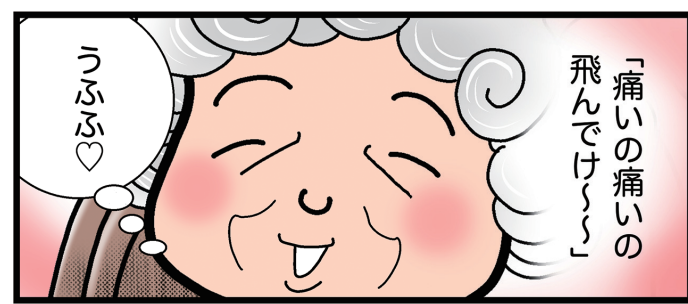
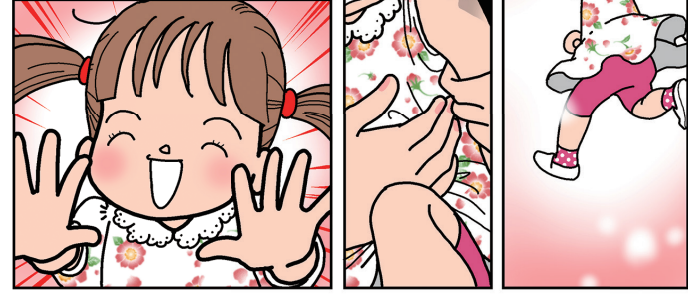
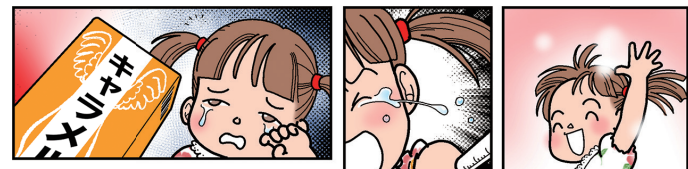
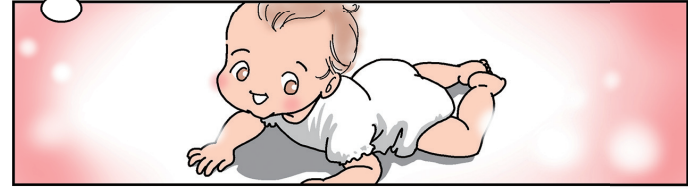
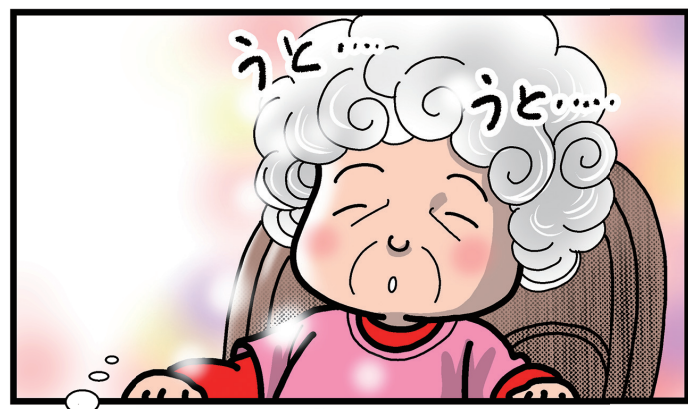




たるはな物語解説 ～認知症の人の苦手を理解したアシストを～

娘さんと約束したワクチン接種の予定を、すっかり失念している花子さん。お互いの思いが噛み合っていない前半シーン。ついに花子さんは怒り出してしまいました。

認知症の方と家族の間では、このような状況が少なくありません。その原因が「認知症だから」となってしまうと、生活状況は改善されなまま、やがて「認知症が進んでしまった」という思い込みにつながる悪循環に陥ってしまいます。

後半は、娘さんが行った「アシスト」のシーンです。アシストとは、「認知症の方が、その人らしく変わらず持っている力を発揮できるように応援すること」。

娘さんは、認知症の母とのやりとりを想像することができました。新しいことを記憶するのが苦手な花子さん。「カレンダーに書いてあるでしょ」と事実を突きつけられても、納得することができず、ますます混乱してしまいます。そのような状態を見て認知症が進んでしまったと悩まれるご家族もいらっしゃるかもしれません。けれど、認知症を理解し接し方に工夫ができる、認知症になっても変わらないその人らしさに気づくことができるのです。

大切なことは、お互いが気持ちよくワクチン接種に行けるということです。娘さんは「世話好きな母は娘に頼まれたら悪い気はしないはず」と想像し「母への頼み事」という形で声をかけました。母のことをよく理解している家族だからこそ、そのアシストです。途中で、探しものを始めた花子さん。娘の想いは届かなかつたのかと思いきや、昔と変わらない母の姿をしっかりと見せてくれました。

認知症に対する偏見や思い込みが、認知症になっても変わらない生活力やその人らしさを見えにくくさせてしまっています。認知症の人の言動の意味を「認知症だから」と決めつけるのではなく、認知症の症状に起因する日常生活の苦手や困り事としてとらえることが重要です。そして、それを改善するための工夫を考える事の大切さを、花子さん親子が教えてくれています。